

越山若水

2021.1.1

文豪夏目漱石の「漱石全集」に若い福井人宛ての書簡が掲載されている。1915(大正4)年1月29日の日付がある。宛先は京都帝国大の寄宿舎にいた山田卓爾という学生である▼漱石への手紙に対する礼状で、「あれ丈長い手紙をかくのは容易な事ではありません」「私の作物があなたに精神的に何物をか付け加へたのが果して事実とすれば私はありがたい事に思ひます」などとしたためている▼漱石は8月9日にも卓爾の福井市の自宅に手紙を出し、「あなたは帰省して御出と見えませぬ」「福井の名産ですぬ」とウニを贈られたお礼を述べ、卒業はいつで何科を専門にするつもりかと尋ねている。若い学生の将来を気に掛けていたのだろう▼卓爾は卒業後医師になり、福井で開業した。子孫が保管している漱石の手紙を見せてもらった。その心に灯をともしたであろう、丁寧で美しい筆跡であった。当時も今も、都会に出た学生はなかなか郷里に戻ってこないが、卓爾は古里で生きる道を選択した▼新型コロナ禍は都会と地方の暮らしを見直すきっかけになった。「密」の都市部から地方へ移住する動きが広がりつつある。豊かな環境の中で「疎」を楽しむ人たちも増えている。本紙は今年、「ふくいをヒラク」のテーマの下、地方ならではの暮らし方に光をあてる。卓爾のように地方で生きること、価値を見いだしたい。